

大目次／想像のさまざま——意味世界を開く——

序	本書を読むに当たって	3	i
第一部 想像と現実		3	
第1章	現実との間合いからみる想像のさまざま	18	
第2章	想像する人の基本的現実——現在と過去の経験——	46	
第II部 現実の次元と意味次元		83	
第3章	知っていることと意味事象——物的事象について知る・知っている——	84	
第4章	言葉——操ることが容易な意味事象・フィクションを描けるということを焦点に——	133	
第5章	想い浮かべると意味事象	273	
第III部 物的現実を目がける想像——想い浮かべる仕方での想像と諸々の意味事象間の関係を利用する想像——		327	
第6章	物的現実を目がける想像	328	
第7章	想像と知識の蓄積・知識の利用——想像における意味事象呼び出しの方向と知識の集約・知識の有りようのさまざま——	461	
第IV部 人と人が関与したものに對する敏感さと想像		485	
第8章	人という知覚対象と人に関する想像	486	
第9章	人が関与して残したものの意味を探す	546	
第V部 像——空間規定を作り出す・像とそれが意味する事柄——		581	
第10章	地 図——「空間形式で何かを示す像」という主題に向けて——	582	
第11章	彫 像——現実世界の一メンバーとして創り出されたものとして何かを表す——	597	
第12章	絵——強く制約された想像・場所の問題——	650	
第13章	演 劇——虚構の世界と出来事——	766	
結 び	自己像と哲学	817	
	本書執筆の経緯について——あとがきに代えて——	835	

本書を読むに当たって.....

序.....

- (1) 想像は広大な領域を人間に開く 3
- (2) 本書は言葉で叙述することで成り立っている 5
- (3) 本書の構成 8
- (4) 「想像が意味世界を開く」ということについて 12

第1部 想像と現実.....

第1章 現実との間合いからみる想像のさまざま.....

第1節 曖昧な現実と判つきりしたものとしての想像 18

- (1) 想像と現実との対比——現実とは何かは分かりきっているという前提だが..... 18
- (2) 想像内容は想像することによってのみ生み出される——想像するとはどういうことかは想像する人には分かっていて..... 23
- (3) 現実は無頓着な想像（空想）と現実を目がける想像 25

第2節 現実の評価と想像 27

- (1) 現実から外れていることを願いながらの想像 27
- (2) 無知と想像 29
- (3) 現実に反することの想像——現実の評価—— 30

第2章 想像する人の基本的現実——現在と過去の経験——.....

第1節 現在というものとその定まりについて 46

- (4) 現実を背景にした空想——憧れや逃避—— 34
- (5) 現実を引き寄せる想像——行動を導く想像—— 37
- (6) 未来の予想という想像 39
- (7) 想像の素材としての知識——三つの知り方と論ずべき課題—— 41

第2節 知覚の現在と過去の事柄 58

- (1) 八分前の太陽を見る？——知覚対象の存在と場所の重要性—— 58
- (2) 推論によって知ることと経験したから知っていること 63
- (3) 「経験したから知っている」？——どういう経験を材料に考えるか—— 66

付論① 居合わせるということ——知覚する私の現在・知覚事象の現在と過去—— 72

- (1) 居合わせるということと他の知覚する人 72
- (2) 知覚する私の現在・知覚事象の現在と過去①——現在の知覚内容は知覚対象の過去の姿か・現在というものをどのよ
うに定めるのか—— 74
- (3) 知覚する私の現在・知覚事象の現在と過去②——すべてのものは時の流れの最先端に在ること・居合わせる人それぞ
れの知覚空間の重なり合い—— 78

第II部 現実の次元と意味次元……………83

第3章 知っていることと意味事象——物的事象について知る・知っている……………84

第1節

- (1)「知ること」の前に「知っている」とはどのようなことを調べる 84
 - (2)嗅覚を取り上げる理由 87
 - (3)「この匂いは……」——匂いを嗅ぐことや行動することと匂いの内容を確認すること—— 90
 - (4)「匂いを嗅ぐ」ことと匂いを「知る」こと——意味事象としての「知っている匂い」—— 94
 - (5)反復と反復として捉えること 104
 - (6)思い出し——「知っている」ことがあやふやになる場合—— 107
 - (7)匂いを思い出すというこの内実 109
 - (8)思い出すことにおける空間規定の必要性 114
 - (9)「この匂いは知っている、桃の匂いだ」——桃・般とその匂い・般・思い出しの不要—— 116
- 第2節 意味事象——意味事象化としての知ること・意味事象としての知っているもの・思い出すもの—— 119
- (1)思い出すものと知っている内容との同質性——時間的な現実を離れた意味事象—— 119
 - (2)「嗅いでいる匂い」を「初めて嗅ぐ匂いとして知る」こと——意味事象化—— 124
 - (3)或るものについての知識と想像 127

第4章 言葉——操ることが容易な意味事象・フィクションを描けるといふことを焦点に……………133

第1節

- 音・音声と文・語 133
- (1)作用するものとしての音・聞き分けて出し分けることができる音声 133
- (2)音声の一区切り——時間に従った区切りの連鎖と文—— 136

第2節

- (1)物的な物と名詞——分節的知覚と行動の対象—— 173
 - (2)主語の位置にくるもの——名詞一般—— 176
 - (3)「学校」という語が用いられる二つの仕方 179
 - (4)概念と言葉——複合的意味事象・辞書(辞典)とは異なる事典の叙述—— 184
 - (5)言葉によって説明されるものとしての概念 197
 - (6)概念の解釈と定義 200
 - (7)語の意味の増殖 204
 - (8)物的なものの名と概念——「阿蘇山」「鶴」—— 212
- 付論② 抽象的な議論について 222
- 第3節 言葉によるフィクションの成立——意味事象が織り成す世界—— 226
- (1)叙述文 226
 - (2)自己否定(同語否定)形式文と自己崩壊するかにみえる文 232
 - (3)同語反復形式の文 236
 - (4)フィクションを描く可能性——一般的なものを言う概念の手助けとその概念から逸脱した個的なもの—— 245
 - (5)個的なものの指定と舞台 253

(6) フィクションであることへの目配せ 259
 (7) 現実の中のフィクション・フィクションという現実 262

第5章 想い浮かべと意味事象

第1節 想い浮かべること 273

(1) 意味事象と想い浮かべること 273
 (2) 想い浮かべは空間形式を伴う——意味事象と現実との通路—— 277
 (3) 知覚できる事象についての文章を読み理解すること・想い浮かべること 286

第2節 想像内容の現実への接続 290

(1) 文章から現実へ——想い浮かべと行動—— 290
 (2) 間取り図——想い浮かべから現実へ—— 293
 (3) 場所の挿絵——もう一つの具体性—— 299
 (4) 人を想い浮かべることと挿絵 305
 (5) 「公正(さ)」「民主主義」・良い景気などに関して想い浮かべること 311
 (6) 想い浮かべることの効用 316
 (7) 音の無い音楽を楽しむ・内語 322

第Ⅲ部

物的現実を目がける想像

——想い浮かべる仕方での想像と諸々の意味事象間の関係を利用する想像——

第6章 物的現実を目がける想像

第1節 パースペクティブ的構造をもつ知覚空間と運動空間との関係に由来する想像 328

(1) 体の外に位置するもの——知覚空間のパースペクティブ的構造と運動空間—— 328

(2) 二つの知覚対象の間の隔たり——遠近と横・空っぽの空間—— 334
 (3) 物の裏側についての想像 341
 (4) 知覚されなくなつたもの・隠れているものについての想像 344
 (5) 部分から全体を想像する 348
 (6) 物的事象の配置の想像——行動の手助けと行動からの解放—— 350

第2節 知覚空間の狭さゆえに生まれる想像——日常の暮らしにおける卑近な想像・世界の涯についての想像—— 354

第3節 人間の知覚の分節的状態に伏することとその構造に由来する想像——意味作用—— 360

(1) 人間の知覚で優位な分節的構造 360
 (2) 匂いから味を想像する——何が重要か・重要性の序列—— 367
 (3) 梨をいつ収穫するか——AがBを意味するときの想像と知識—— 372

第4節 知覚空間で横の関係にあるものの一つが他の何かを想像させる 378

(1) 犬の吠え声が聞こえて身構える人、懐かしいと犬の方に向かう人、来訪者を探す人 378
 (2) 藤の花が咲くころイワナがよく釣れる——運動空間で固定的位置関係にあるもの—— 383

第5節 因果関係に関わる想像 387

(1) 柳の下の泥鰌・カツオドリと鯉の群れ——繰り返しを求めて—— 387
 (2) 二つの因果関係を隠しもつ横の関係——強い関係としての因果関係—— 392
 (3) 因果関係は単純ではない——結果の予想・原因の想像—— 395
 (4) 因果関係を伸ばす——因果系列—— 397
 (5) 風が吹けば桶屋が儲かる——長い時の推移における因果連鎖—— 399

第6節 自然科学における想像——質の処理と存在の概念—— 401

(1) 生じることと生じさせることとの間——パストゥールの発酵理論と葡萄酒醸造技術の革新—— 401
 (2) 科学理論 407

第7章

想像と知識の蓄積・知識の利用

想像における意味事象呼び出しの方向と知識の集約・知識の有りようのさまざま

- (3)再び八分前の太陽——運動空間の知覚空間からの分離と居合わせるということ—— 437
- (4)分節的知覚における知覚的質とそれらを性質とするものとの身分の差——色とは何かに関する議論を材料に—— 442
- (1)「桃は水に浮く」「水は桃を浮かばせる」 461
- (2)連想(取り留めのない想像)——内容の知識の一部への昇格・方向の自在さ—— 467
- (3)連想における言葉の関与——「鵜呑みにする」「カバのような男だ」 471
- (4)空想・フィクションと知識——知識の気儘な連結・構成的想像—— 474
- (5)想像内容と知識内容との同質性再び 479
- (6)雑学的知識 481

第IV部

人と人が関与したものに對する敏感さと想像

第8章

人という知覚対象と人に関する想像

- 第1節 人に対する敏感さと人についての想像 486
 - (1)人の体の知覚におけるさまざまな想像 486
 - (2)視線の作用 488
 - (3)目の表情・顔の表情 492
 - (4)「目は口ほどにものを言い」・「目は心の窓」——表出—— 495
 - (5)人を見て想像すること(1)——心の状態(感情や考え……)—— 499
 - (6)人を見て想像すること(2)——体の感覚と付帯的感情—— 501
 - (7)人を見て想像すること(3)——行動と意図や意欲・気の進まなさ・欲望等—— 503
 - (8)人を見て想像すること(4)——性格や生活……—— 509
- 第2節 己について想像させる——対人行動の一つの様式としての自己表現—— 511
 - (1)表情や仕草等に意味をもたせる・想像させる——人に対する働きかけ—— 513
 - (2)働きかけの目標——中継点としての想像させること—— 517
 - (3)訴えと演技と 519
 - (4)体の生物的条件と人が自分で行うことができる体部分 523
 - (5)印象をつくり出す——体・髪型等・衣服・装身具……表情・立ち振る舞い—— 525
 - (6)「場」の中の服装と起居振る舞い——文脈としての「場」と「状況」との違い—— 530
 - (7)行動を見せる(1)——直接に相手に働きかける—— 535
 - (8)行動を見せる(2)——相手に関係ない行動をしつつ相手に訴える—— 540

第9章

人が関与して残したものの意味を探す

- 第1節 人が関与したものに対する敏感さとその意味を問うこと・見つけること 546
 - (1)「この杭は何だろう?」——人が関与したことへの敏感さ—— 546
 - (2)「この杭は何だろう?」という問いに関わる想像の働きと意味のさまざまな有りよう 553
 - (3)馴染みの人工物——何のためのものか・物的機能に対応する用途と意味上の制限—— 555
 - (4)人の関与の跡・徴・標——知覚世界の二層化—— 559
 - (5)人工物によって誘われること 565
- 第2節 行動の二面性を引き継ぐ人工物の二面性——物的働きと意味発信としての働き—— 570
 - (1)行動の二面性 570
 - (2)二面性をもつ道具等 573
- 第3節 選択するものとしての人間理解・責任と権利——生じるように生じるものと他でもあり得たもの—— 575
 - (1)責任 575

(2) 権利 578

第V部 像..... 581

——空間規定を作り出す・像とそれが意味する事柄——

第10章 地 図..... 582

- (1) 道路標識の狸の絵 582
- (2) 道とヘンゼルの小石の群れと地図——知覚空間から切り離された広がり—— 584
- (3) 地図の具体性 590

第11章 彫 像..... 597

第1節 彫像であるための条件 597

- (1) 何かが見えて、それを像として見る①——彫像の場合・見えるものを「**として見る」二つの仕方—— 597
- (2) 形が似ている——大きさと色は？—— 603
- (3) 似ているだけでは……——彫像と彫像が表すものの非対称性・特殊な意味事象—— 606
- (4) 彫像としてのリアリティ 610

第2節 彫像が設定する虚構の空間・固定されている時間 616

- (1) 彫像の組み合わせ——一つの世界の設定の明確化—— 616
- (2) 私が夢みる野外彫像群 621
- (3) 観葉植物そっくりのインテリア商品 622
- (4) 人形で遊ぶ少女・飯事——見立て—— 624
- (5) 彫像が固定している時間と現実の時の流れの中に置くこと——彫像という性格が副次的になる—— 629
- (6) 博物館が提供する恐竜のミニチュア・模型 632

第3節 彫像が表すものの一般的性格と特定のものを表すことと 633

- (1) 彫像のリアルさ再び——想像世界の中で特定の個的なものを表す—— 633
- (2) 彫像が表しているものを現実存在する(した)ものとして了解する場合——言葉の助けと言葉を信頼すること—— 636
- (3) 彫像は概念を表せるか——モデルと言葉と—— 638
- (4) 彫像に籠めるメッセージ——レーニン像とタイムール像・鎌とハンマーの像—— 642
- (5) 標という用途に向かつて——上野駅に置かれていたパンダの彫像—— 647

第12章 絵——強く制約された想像・場所の問題..... 650

第1節 平面(ないし曲面)における形と色——或るものを単独で描いた絵—— 650

- (1) 考察の方針 650
- (2) 何かが見えて、それを像として見る②——単独の何かを表す絵の場合・彫像との違い—— 654
- (3) シルエットと影——面的な一纏まりとしての最も大きな輪郭—— 661
- (4) 平板さが減じた影絵——諸部分の輪郭と配置・意味事象を呼び出すこと—— 666
- (5) 複数の影絵の組み合わせ・カラーの影絵 680
- (6) 塊を想わせる絵——図に対する地ではない場所の重要性—— 683
- (7) 二つの写実画——絵が誘う想像がもつ制約の内実と二次的想像—— 690
- (8) 二次的な想像と場所の広がり——存在感ある絵—— 702

第2節 多数のものを描いた絵と空間規定 708

- (1) 遠近と横・空っぽの空間 708
- (2) キャンバスの上部と下部——描かれたものの上と下と遠近と—— 711
- (3) キャンバスを見る人の位置——パースペクティブと地面の見え方・道の絵から地図へ—— 718
- (4) 道の絵と地図 721

第3節 描かれたものの理解から始まる二次的想像——絵が何かを意味する場合や自由な想像—— 730

(1) 特定の時間とリアリティ 730

(2) 流れる時間を絵は表せるか——連作と「信貴山縁起絵巻」・紙芝居・絵本・コマ割り漫画—— 735

(3) 先立って知っていることを読み込む絵——歴史画・諷刺画・文人画などにおいて要求される二次的想像—— 743

(4) 主題をもった絵と単なる写真画あるいは写真画として見ることに 746

(5) 標の機能をもつ絵——単純化・デフォルメ—— 751

付論③ 鏡に映った像 757

第13章 演劇

——虚構の世界と出来事——……………766

第1節 舞台——観客にとって—— 766

(1) 拵え物など 766

(2) 舞台——場所の設定—— 770

第2節 演劇の時間 774

(1) 時間の二重性 774

(2) 舞台の時間の流れ方 779

(3) 一つの時代か 783

第3節 演技者 785

(1) 観客にとっての演技者 785

(2) 演技者自身 788

(3) 演技の練習と舞台での演技 791

(4) 二重性を保つことと統制——脚本・ごっこ遊びとの比較—— 794

(5) 演劇の主題と覗き見 797

(6) 日常の暮らしにおける演技——脚本のない演技—— 799

(7) 祭や儀式と演技・現代の職業と演技 805

第4節 自らとは別のものを表すさまざまな形式とそれらの組み合わせ・言葉の関与 809

(1) 脚本と文学・演劇の中他の作品における科白や所作 809

(2) 演劇と音楽・音楽の曲名と歌 811

(3) 絵の中に差し挟まれたお話の絵とお話・風刺画 814

(4) 神話を表す彫像・建造物一般 815

結び

自己像と哲学

……………817

(1) 自己像を描く——意味事象としての理解と想い浮かべること—— 817

(2) 自己像を思うとき・自分の自己像を誰かに受け取ってもらいたいとき・人の自己像を想像する 823

(3) 諸々の自己像に序列はあるか 825

(4) 哲学 827

本書執筆の経緯について——あとがきに代えて——……………835